



### 矢島 落男 選

大仏の裏の寒さのしづかなり

吉川市 人見 正

【評】何処の大仏だろう。奈良それとも鎌倉？各地にある。その裏を通ってみると、寒く、静かであったという。それだけが、どこか象徴的な意味も感じる。

当番で神社にこもり年を越す

京都府 山田 国雄

【評】いつもは神主もいない無人の神社も大晦日だけは参詣人もあり、近くの人たちが当番で泊るのだから。大変でしたね。日記のような句。振り上げし幣天井に触る神楽

熊谷市 田島 良生

【評】不安定な形だが、天井が低いのか幣の棒が長いのか、神楽の様子が描写されている。「触る」は省略して「かな」止めは如何か。牡蠣船の屋号浮き立つ大漁旗

東大阪市 梶田 高清

枯草の触れあふ影の優しさよ  
餅を搗く嘗てその手でゲバ棒を  
着ぶくれてああ満員の電車かな

栃木県 あらあひとし  
横浜市 岡 まゆみ

雪掻きの道具揃ひし向かひ打つ  
ストープにタオル干しある診療所  
発車まで川原の足湯下呂の冬

東京都 藤井 正明  
枚方市 大村ハルエ

### 高野ムツオ 選

妖精のをどる馬穴の厚水

周南市 木船 君枝

【評】庭の隅に放置しておいた馬穴にいつの間にか厚い水が張っていた。ふとその上に踊る妖精の姿を見つけた。幻像かもしれない。フィギュア競技のスケートリンクを想像したせいかもしれない。

冬童かつてこより見えた家

東京都 中島 徒雁

【評】よく訪れていた丘にしばらくぶりで立った。ここから見えていた家がなくなっていた。可憐な冬童は以前と変わらなず咲いていた。浮き上がる柚子の力や冬至風呂

横浜市 高橋 功夫

【評】柚子風呂は柚子の匂いから生命力を頂く風習だが、ここでは浮力にも霊力を感じている。五線譜を歩くが如き落葉道

守谷市 久保田洋二

ポインセチア駅の入り口こと言ふ  
恐らくは一都六県雪催い  
虎落笛海に出づれば海の声

千葉県 森田千代子  
深谷市 三上 通而

電車待つ高架の駅の虎落笛  
昇降機星空へ伸ぶ大晦日  
湖の晴れて義仲寺時雨れけり

東大阪市 木田 博幸  
川越市 大野看之介  
八王子市 徳永 松雄

### 正木ゆう子 選

年用意と先々をこしらせて

旭市 工藤 豊

【評】仲の拗れることは少なくないにも関わらず、句にはなりにくいものだ。難しい内容を端的に詠んで、同じ事情の人の心に優しく届きそう。何時かうまくいきますよう。福寿草伯母叔母の三姉妹

飯島まゆみ

飯島まゆみ

【評】作者の母は三姉妹の真ん中。身を寄せて咲く福寿草がそのまま姉妹の姿に重なる。ア音が多いせいか、漢字が多いのに、柔らかな印象。球体を滑り落ちる寒波かな

白井市 毘舎利道弘

【評】一読「？」が浮かび、すぐに地球の球体と了解。寒波が北から南下することは知っているが、球体を滑り落ちるとは、独特の言い方だ。農協の前に野菜の宝船

相模原市 八木ミネ子

まだ何も乗せぬ炬燵の四角かな  
初句会無明苦にせぬ面と  
小春日や背中を合はせ聞く鼓動

高砂市 今井 慎一  
等間市 沢崎だるま

高なりの採れない全部木守柿  
百歳の風景見たしなすな粥  
冬の日やサランに酔ふ君とある

松戸市 稲葉 豊美  
取手市 小日向教明  
船橋市 中島かず代

### 小澤 實 選

女正月祖母の遺品の春画観る

大津市 星野 暁

【評】女正月は小正月、正月忙しかった女性たちが新年を祝う。女性たちが集って、祖母が生家からもたらした春画を眺めて、祖母を偲んでいる。観るだから威儀を正す感じ。ダイヤル式テレビがちやがちや大晦日

伊勢市 藤田ゆきまち

藤田ゆきまち

【評】たしかにダイヤル式テレビのチャンネルを回すと、ガチャガチャと響いた。大晦日の夜、チャンネルをあれこれ変え、楽しんでる。歩く鳴く石突く歩く鳴く千鳥

横浜市 岡 一夏

【評】動詞が五つ並んで、同じ動詞も二つつ出てくるが、最後に千鳥が現れて、浜辺でよく動きまわる千鳥の様子がはつきりと見えて来る。開演のブザーに咳くやそかしこ

東京都 天地わたる

古本の煙草のほひ十二月  
がさがさすばすば落葉の山路行く  
こゑ出して「遠島百首かるた」読む

川崎市 折戸 洋  
桐生市 中村 正人

ただ笑う母と二人で日向ぼし  
加減して手を咬む猫や大晦日  
小春日の今日が最後のバスが来る

山形県 是長 勝  
相模原市 野中 昭宏  
甲府市 村田 一広

拭き上げてコード細しよ冷蔵庫

川崎市 井手真知子

【評】濡らした布で拭くようにして、埃を被ったコードを拭く。長いコードをしごきよぶようにして拭き上げるとき、冷蔵庫は動き者なのに、コードは案外細いんだなと思つたことが私にもあったが、言葉にはしなかつた。同じことを多くの読者が思うだろう。世界情勢や宇宙を詠むわけではないこんな句にも、俳句の確かな場がある。(正木ゆう子)

### 年間賞 俳句 ②

人生でいちばん水分とった夏

相模原市 相模湖福幹

【評】昨夏は非常に暑く、とても永かった。水分を十分に取らないと、生命の危険さえ感じる暑さだった。ほくも外出時には水筒を持ち歩いて、よく水を飲んだ。この作者の感じた「人生でいちばん水分とった」というところに共感する。自分自身の肉体を通して、この夏を捉えている。「とった」という口語のざっくりらんなところもいい。(小澤實)



題字デザイン・イラスト 福田美蘭